

札幌子どもミュージカル育成会 元会長・細川さん死去

国内外で平和を訴え

関係者、家族から惜しむ声



8日に88歳で亡くなった札幌子どもミュージカル育成会の元会長、細川真理子さんは、アイヌ民族や平和を題材にした創作ミュージカルを通じ、国内外で平和の大切さを訴えた。関係者は「厳しさの中に、平和を願う強い気持ちがあった」と惜しんだ。

長崎市出身の細川さんは

終演後、舞台上から手を振る細川真理子さん。2009年10月(遺族提供)

1958年、医師だった忍さん(93)との結婚を機に札幌に移住。75年に母親向けの勉強会を結成し、ピアノを弾いていた経験から、子どもに歌を教え始めた。81年には札幌子どもミュージカル育成会を設立した。

一緒に指導した妹の岩城節子さん(85)は「姉はいつとも真剣で時に厳しく叱ることもあった」と振り返る。練習は夫の忍さんが理事長を務める発寒中央病院の1階ロビー。毎週土曜、午前の診療が終わった院内に子どもたちの歌が響いた。

10歳から13年間参加した札幌市北区の小路美和さん(45)は「学校では学べないことを学べた」と感謝する。中学校教諭となり「先生の

指導はこの道を目指すきっかけになった」。

細川さんはアイヌ民族初の国会議員故郷野茂さんとの出会いを機に、アイヌ民族の叙事詩を題材にした作品も手がけた。

茂さんの次男志朗さん(62)は日高管内平取町。「父の元を何度も熱心に訪ね、アイヌ文化を吸収し作品づくりに生かしていた」と振り返る。

高齢となり、会は2015年に解散。18年頃から体調を崩して入退院を繰り返す、手指が不自由になってピアノも弾けなくなった。それでも教え子らが見舞いに来ると「またミュージカルをやりたい」と訴えた。夫の忍さんは「音楽で平和の大切さを伝える意欲は消えなかった」と話した。

(服部貴子)

哀 惜

幼児と小中高生が活動するミュージカルグループを、妹の岩城節子さん(85)とともに30年以上にわたって率いた。

心弾むメロディー、親しみやすい物語には、平和への願いや共存の大切さが通奏低音のように響いていた。その姿勢は、音楽を通して子どもたちの生きる力を育みたいという思いと相まって、多くの人々を動かした。

アイヌ民族出身の初の国会議員となった故菅野茂さんからユカラ(叙事詩)を学び、当時は今ほど注目されていなかったアイヌ文化をミュージカルに取り込んで「きつねのチャランケ」や「ポロリントン」を制作した。その過程では、NHK会長を務めた故川口幹夫さんが途中から脚本・演出を担当するなど、名の通った人たちが手を差し伸べた。社会学者の故鶴見和

ほそかわ まりこ 細川 真理子さん

元札幌こどもミュージカル育成会会長

7月8日死去 88歳



菅野茂さんをはじめ、さまざまな人にお世話になったと感謝を口にする細川真理子さん―2011年、札幌市内

広い人脈 公演は海を越え

子さん、駐日ポーランド大使を務めたヤドビガ・ロドビツチさん…その人脈の広さには幾度となくびっくりさせられた。

出身地の長崎、ポーランドなどでの公演と各地の子どもとの交流のほか、ローマ教皇の前で子ども

たちが歌声を披露する機会も与えられ、活動は国内外に広がった。記者が足しげく通ったのは15年

ほど前。こどもミュージカルに賭けた半生を北海道新聞の「私のなかの歴史」で連載した。グループの練習場所でもある、医師の夫が

運営する病院に毎日のようにうかがい、お昼を食べながら話を聞いた。

練習の時は、子ども一人一人の様子を見定めながらきめ細かく指導した。叱ることもなかったわけではない。一方で公演の際の補助金申請などの書類作りは不得手で、見かねた周りの人たちが手を貸していた。親しみやすさと厳しさ、起業家のような大胆さを併せ持つ人だった。

今もふと気がつく歌詞の一部を口ずさんでいることがある。♪シンクイエ・バルゾ。ポーランド語で「本当にありがとう」。この歌詞を、故人にあらためてさげたい。(編集本部 稲塚寛子)